

赤い風船

さと子は、日曜日にお母さんといっしょに買いものに出かけました。前からほしかったくつを買ってもらえるので、呉^{くれ}駅^{えき}につくとわくわくしてきました。まぢきれなくなつて、かいだんをかけ上がりお母さんの方をふりかえりながら、話しはじめました。

「お母さん、早く早く。わたしね、ゆみちゃんと色ちがいのくつがほしいんだ。」

そう言つてふりかえつた時、よこからきゆうに小さな女の子が走つてきました。

「あっ。」

ぶつかったひょうしにつまずいて、女の子が手にもつていた赤い風船がとんでいってしまいました。女の子はとんでいった風船をじつと見ています。

「ごめんなさいね。うれしくつていきなり走り出すもんだから・・・。」

女の子のお母さんが、だきおこしながら言うと、後ろからさと子のお母さんもやってきました。

「いえいえ、こちらこそすみません。うちの子がわるかつたんです。風船とんでいってしまいましたね。」

「いいんですよ。この子が手をはなしたんだから。風船はがまんするよね。」

女の子は風船を見つめたまま目になみだをうかべていましたが、くちびるをかみしめ、うなずきました。

さと子がそのまま行こうとすると、後ろからお母さんにせなかをおされました。

「さと子、ちゃんとあやまりなさい。」

「えっ。なんでわたしがあやまらないといけないの。」

さと子は、なっとくがいかず、あやまることはできませんでしたが、目になみだをうかべてがまんしていた女の子の顔が心にのこっていました。

つぎの日、ゆみとおそろいのくつをはいて学校へ行ったさと子は、早くおそろいのくつをはいてゆみといっしょにあそびたくてしかたありません。ゆみとは、大休けいにいっしょにあそぶやくそくをしていたので、早く休けい時間にならないかと、そわそわしていました。チャイムが鳴って、二時間目のおわりのあいさつをする、いそいでボールをとりに行き、ゆみをさそって、くつばこへとむかいました。

「ゆみちゃん、早く。」

いそぎ足で六年生教室の前を通ろうとしたとき、目の前に六年生が出てきました。ちょうど、教室から出ようとした六年生にぶつかって、ころんできましたのです。

「わっ、ごめん。大じょうぶだった。けがはない。」
「天じょうぶです。」

「ぼくがちゃんと見ていなかったからごめんね。」

「いえ、わたしがいそいでいたから。」

「でも、ぼくの方が大きいからね。ぶつかったときびっくりしたでしょ。」

「そういうと、ころがつていった赤いボールをひろって、もってきてくれました。」

「気をつけてね。」

「おるいのはわたしの方なのに……。なんてやさしい六年生なんだろう。」

なんとなくさわやかでいい気もちになりながら、手わたされたボールを見てみると、ふと、さと子の頭の中に、前の日にとんでいた赤い風船と女の子のかなしそうな顔がうかんできました。

